

Ⅱ ホンモロコ放流追跡調査

山根恭道・川島隆寿

ホンモロコは宍道湖淡水化後の魚種転換対策魚として導入され、現在では種苗の大量生産も安定化している。生産された種苗は昭和56年度より昭和60年度まで、宍道湖西岸部の淡水域へ毎年20～30万尾が放流されて来た。しかし、宍道湖内での増殖は確認されず生残状況の把握もされていないことから、昭和57年度から毎年10万尾程度の放流をおこなって来た、西潟ノ内(図1)1ヶ所に昨年度から放流し調査を試みている。西潟ノ内は水門により宍道湖、佐陀川とは完全に仕切られ、面積は10ha、水深2m、湖岸は全体アスが繁殖し池内の水は、農業用水として利用されている。

1. 調査方法

1) 放流尾数と放流月日

昭和62年12月17日、放流尾数18万尾、平均体長45.9mm、体長範囲40～58mm、平均全長56mm、平均体重1.02g、平均肥満度10.5。

昭和63年3月30日、放流尾数2.7万尾、平均体長48.4mm、体長範囲40～55mm、平均全長58.6mm、平均体重1.45g、平均肥満度12.8。

合計、放流尾数20.7万尾の種苗を西潟ノ内D地点に放流した。

2) 調査月日と採捕漁具及び

調査地点

昭和62年7月9日、10月30日に調査地点A、Bにおいて投網(2.5分目)により、また7月22日Cにおいて刺網(38～45目)、をおこない、採捕魚をホルマリン固定し持ち帰り測定した。

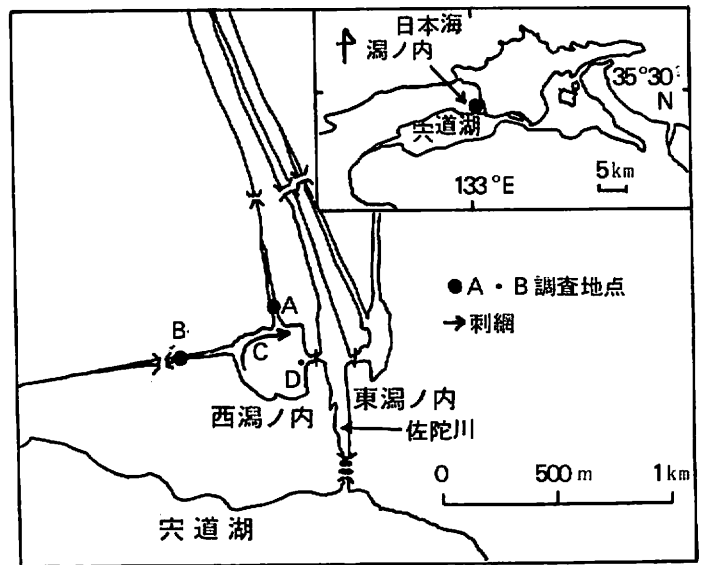


図1 調査地点

2. 結果及び考察

採捕結果を表1に採捕魚の体長、体重、肥満度の組成を図2に刺網によるその他の魚種を表2に示した。

採捕尾数は、7月と10月に計3回おこない51尾であった。本年度は放流時期が12月と3月であり採捕した魚は体長から前年度11月26日の放流魚であると考えられる。しかし放流時の平均全長は58.7mmであり放流時より成長はほとんどしていないことになる。さらに前年度25万尾を放流したのにかかわらず採捕尾数が少なく歩留も悪い。これについては昭和62年3月18日及び3月28日に宍道湖内のマス網に前年度放流魚だと思われるホンモロコ4尾 (① SL57.0mm, BL53.1mm, BW1.7g, ② SL60.2mm, BL55.1mm, BW2.1g, ③ SL67.5mm, BL60.0mm, BW3.8g, ④ SL68.0mm, BL60.8mm, BW4.0g) 4才魚(年輪から)1尾(SL107.6mm, BL97.8mm, BW15.6g)が採捕されたことから、潟ノ内へ

表1 採捕結果

項目	調査月日		
	7月9日	7月22日	10月30日
採捕尾数(尾)	27	10	15
全長(mm)	6.02 ± 0.79	3.13 ± 1.68	7.45 ± 0.61
体長(mm)	5.06 ± 0.64	6.83 ± 1.41	6.28 ± 0.52
体重(g)	2.00 ± 1.02	5.87 ± 3.15	4.15 ± 1.32
肥満度	15.43 ± 0.45	18.42 ± 1.86	16.13 ± 0.51

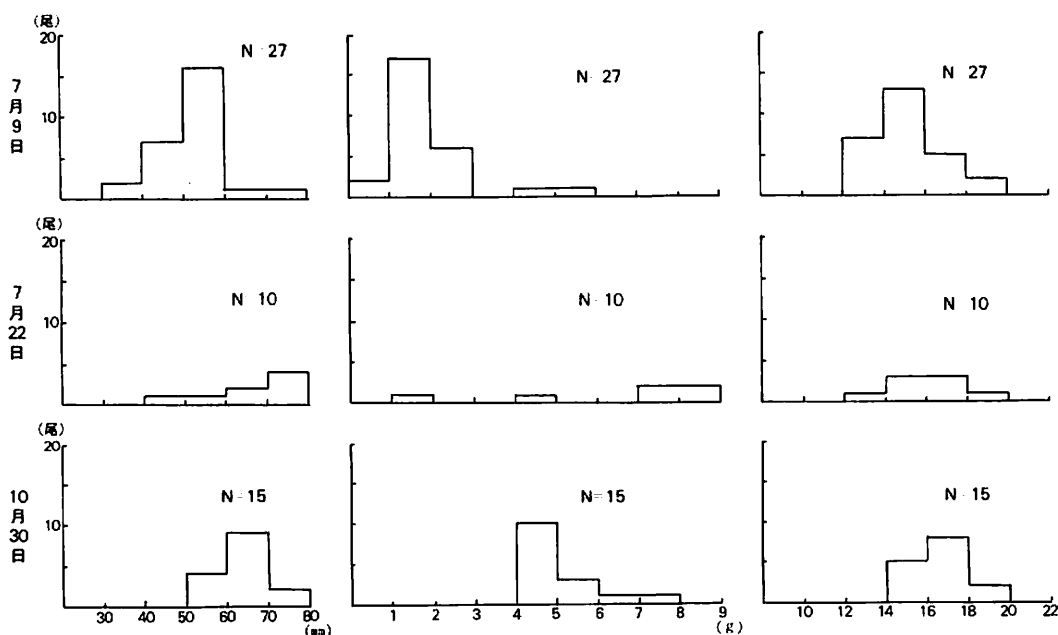


図2 採捕魚の体長、体重、肥満度

放流したものが宍道湖に逸散したため、また潟ノ内にはナマズ、ライギョ等の大型の魚類が生息しこれらによる食害によるためではないかと考えられる。

昭和62年7月22日に刺網をおこない採捕したホンモロコ以外の魚類は、タナゴ186尾BL2.9~5.5cm、タビラ26尾3.1~5.8cm、モッコ10尾4.3~8.9cm、ハヤ8尾5.2~9.6cm、フナ4尾4.8~6.2cm、ナマズ1尾32.2cm、であり、タイリクバラタナゴが圧倒的に多く次いでタビラ、モッコ、ハヤ、フナでありこれらも数多く生息している。また潟ノ内の底質は湖底全域ヘドロであり放流したモロコにとって潟ノ内は好的な生息場とは言えず、湖外へ逸散するか斃死していくものと考えられる。

したがって放流効果を把握することは非常に困難であるが、潟ノ内、宍道湖で採捕されたモロコの年齢形質、成長、成熟度等の把握をする必要がある。